

コミュニティ活動研究所長期プロジェクト「大学生が関係人口として過疎地域に関わることによる教育効果、および地域活性化効果に関する研究」2024 年度活動報告

森 本 祥 一*

1. はじめに

本稿では、コミュニティ活動研究所の「長期的な基礎研究プロジェクト」として今年度採択された「大学生が関係人口として過疎地域に関わることによる教育効果、および地域活性化効果に関する研究」の活動について報告する。

関係人口とは、特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者で、定住人口でも交流人口・観光客でもなく、企業でもボランティアでもない、新たな地域外の主体を指す（田中 2021: 77）。筆者は、2014年度より、専修大学経営学部におけるゼミナール教育の一環として、新潟県南魚沼市の辻又という地域に関わり続けてきた。活動のきっかけは、新潟県が公募していた「大学生の力を活かした集落活性化事業」であったが、事業終了後もゼミ生とともに自主的に活動を続けてきた（専修大学経営学部森本ゼミナール編 2016）。そして、今年度より青山学院大学コミュニティ人間科学部に着任し、本研究所のプロジェクトとして、改めて今後も活動を継続していくための地盤固めを目指す。

ご承知の通り、コミュニティ人間科学部には「地域実習」がある。これまで筆者がゼミナール教育で目指してきたところは、この地域実習が目指すところと一致している。一方で、ゼミナール教育では、長期的に、かつ、より深く地域に関わることができる。また、長年同地域に関わり続けて築いた信頼関係により、学生の意思が尊重され、活動内容の自由度も高い。つまりは、前述の関係人口として、学生が地域づくりの担い手の一員に認められ、期待されている

のである。

しかしながら、これまで一連の活動に参加した学生の教育効果については、指導者目線での主観的な印象としてしか把握しておらず、地域側の活性化効果については、質的データ分析を試みてはいるものの（森本 2016a, 2016b）、活動 2 年目の分析であり、活動を継続し、活動の幅も広がった現在と状況が大きく異なる。

よって本研究では、辻又のような過疎化・高齢化が進んだ地域に、大学生が関係人口として長期的に関わることによる地域側・学生側双方への影響について明らかにする。本研究で得た知見を地域実習へとフィードバックし、より教育効果を高めるための礎としたい。

2. 昨年度までの活動実績

新潟県から事業を受託した2014年度から、2023年度までの活動の概略を以下に示す。詳細については、別途文献を参照されたい（森本 2015, 2017, 2024）。

- ・2014年度：新潟県の「大学生の力を活かした集落活性化事業」を受託。辻又のフィールドワークを経て活性化策を考案、報告書を提出。
- ・2015年度：県の事業終了後も自主的に活動を継続。辻又産のコシヒカリを使ったおにぎりを商品化し、みなとみらいのリーフひだまりマルシェにて販売。また、（一社）おにぎり協会と協力し、辻又産の茗荷を使ったレシピを開発、Cookpadの公式キッチンにて公開。
- ・2016年度：先の事業の新制度を受託。これま

*青山学院大学

での活動を書籍にまとめて出版。辻又産コシヒカリを商品化し、生田緑地の多摩区民祭で販売。

- ・2017年度：NPO法人 魚沼伝習館と協力し、辻又で首都圏の小学生を受け入れるサマーキャンプを開催。
- ・2018年度：生田緑地の多摩区民祭と丸の内の行幸マルシェで辻又産コシヒカリを販売。
- ・2019年度：新百合ヶ丘のしんゆりフェスティバル・マルシェで辻又産コシヒカリを販売。
- ・2020年度：ネットショップのBASEと新百合ヶ丘のしんゆりフェスティバル・マルシェで辻又産コシヒカリを販売。
- ・2021年度：新潟県の「若手人材等による地域課題解決提案事業」を受託。新百合ヶ丘のしんゆりフェスティバル・マルシェで辻又産コシヒカリを販売。
- ・2022年度：辻又の古民家を改装して営業しているカフェ「六つ季の家」にて、築100周年記念イベントを企画・開催。登戸のtabitali cafeとコラボメニューを開発し、期間限定で販売。新百合ヶ丘のしんゆりフェスティバル・マルシェで辻又産コシヒカリを販売。
- ・2023年度：辻又の古民家カフェ「六つ季の家」にて、フラワーアレンジメントのワークショップを開催。新百合ヶ丘の商業施設エルミロードにて、「しんゆり秋の米まつり」というイベントを企画・開催。

以上、いずれの活動も、教員指導のもと、基本的には学生が自ら考え、自ら実施した。また、これらの活動以外に、年中行事を通じた交流も継続し、ラポールの構築に努めた。

3. 今年度の活動実績

これまでの活動を引き継ぐため、まずは携わってくれるメンバーを、筆者が担当するコミュニティ人間科学部の演習科目である「基礎演習Ⅰ」、および青山スタンダード科目である「フレッシューズ・セミナー」の受講者から募った。活動の経緯を説明し、参加を呼びかけたところ、基礎演習Ⅰから6名、フレッシューズ・セミナーから3名（いずれもコミュニティ人間科学部の1年次生）が名乗り出てくれた。同様に、「地域社会調査法入門（統計調査）」の受講者からも2年次生4名が参加を希望してくれた。今年度は、この13名で活動を行った。

- ・2024年5月25日：フィールドワーク

地域のこと、辻又のことを知るため、上記メンバーのうち5名が辻又を訪れ、フィールドワークを行った。

現地では、学生が集落内を自らの足で歩き回って地理や環境を把握したり、交流会に参加して住民の構成や人柄、関係性などを把握したりした。



交流会の様子

さらに、辻又の主要産業である米作と特産品のコシヒカリについて理解を深めるため、棚田での田植えを体験させて頂いた。



田植え体験の様子

・2024年7月5～6日：七夕祭のお手伝い

辻又川には清冽な雪解け水が流れており、初夏には野生のホタルの大群を見ることができると。こうした辻又の自然環境について理解を深め、かつ住民の方との親交を深めるため、学生8名が七夕祭・ホタル鑑賞会に参加した。

また、今後の活動について辻又の方と打ち合わせを行い、予定と方針を確定した。

・2024年8月16～17日：運動会のお手伝い

辻又では、100年以上続いている運動会が、例年8月のお盆明けの土曜に行われる。過疎化が進んだ辻又においては、こうした年中行事の継続も危ぶまれる状況にある。活動メンバーのうち、9名が現地を訪れ、運動会の開催を支援した。



運動会の様子

・2024年10月11～13日：六つ季の家でのイベント企画・開催

「六つ季の家」は、辻又にある築100年を超える古民家をリノベーションして営業しているカフェ兼コミュニティスペースである。六つ季の家を辻又のためにもっと有効活用したい、対外的な認知度も広めたい、という長年付き合ひのある管理人の方の依頼により、一昨年は築100年を記念したイベント、昨年はフラワーアレンジメントのワークショップを開催し、好評を博した。今年度も是非イベントを企画・実施して欲しいということで、活動メンバーが7月訪問時から検討を重ね、8月訪問時にはイベントの企画内容とカフェで提供するオリジナルメニューを提案し、準備してきた。イベントのチラシも学生が作成し、9月に南魚沼市だけでなく、魚沼市、十日町市を周って頒布した。



学生が作成・頒布したイベントのチラシ



学生が考案・提供したオリジナルメニュー



イベント当日のワークショップの様子

イベントは、六つ季の家の名前の由来でもある雪国特有の六つの季節をイメージした草花を用い、ハーバリウムを作成できるワークショップを企画・実施した。イベント当日は、学生6名がスタッフとして対応した。2日間で延べ60名を超える参加があり、盛況のうちに終わることができた。

・2024年11月17日：しんゆりフェスティバル・マルシェに出店

辻又の課題のひとつに、米作農家の担い手が年々減少し、耕作放棄地が増えていることが挙げられる。原因はいくつかあるが、利益が得られないことが大きな問題となっている。そこで、辻又のコシヒカリをブランド化し、利益が得られるようなビジネスモデルを確立するため、首都圏の消費者をターゲットとして相応の価格で販売する活動を2018年から行ってきた。

今年度も引き続き同様の活動を行い、辻又ブランドの定着を図った。店舗装飾や商品の価格設定、商品パッケージなどを学生が検討し、小田急線新百合ヶ丘駅前で行われている「しんゆりフェスティバル・マルシェ」に出店した。学生8名が当日の搬入から販売、撤収作業を行った。



マルシェ当日の様子

以上が、本報告執筆時点での今年度の活動実績である。以降は、2025年2月22～23日に行われる節分祭・雪まつりに学生7名が参加する予定である。

4. 今後の活動予定

次年度は本プロジェクトの最終年度のため、今年度と同様の活動を継続しつつ、参加学生と地域住民へインタビュー調査を行い、それぞれに与える影響について調査・分析を行う予定である。

今年度明らかになった課題として、メンバー集めが難しく、また集まったとしてもあくまで任意参加であり、ゼミナールや授業ではないため、参加学生それぞれモチベーションもまちまちで、スケジュール調整も難しく、一堂に介してミーティングを行うこともままならず、教員との意思疎通に問題が生じることも多かった。

次年度は、アドバイザー・グループ制度を活用したり、地域実習1とのシームレスな接続を検討したりなど、メンバー集めや帰属意識を高める工夫を行いたい。

参考文献

専修大学経営学部森本ゼミナール編, 2016,『大学生、限界集落へ行く』専修大学出版局。
田中輝美, 2021,『関係人口の社会学』大阪大学出版会。

- 森本祥一, 2015, 「大学生の力を活かした集落活性化事業の実践結果と考察」『地域活性学会研究大会論文集』 7: 263-266.
- 森本祥一, 2016a, 「情報システム論に基づく地域活性化アプローチの実践と効果の分析」『情報システム学会 第12回全国大会・研究発表大会予稿集』 (2024年12月16日取得, https://doi.org/10.19014/proceedingsissj.120_c14).
- 森本祥一, 2016b, 「地域情報システム再考：文化と経営の視点から」『地域デザイン』 8: 69-94.
- 森本祥一, 2017, 「地域と大学の協働による持続可能な活性化の取り組み」『地域活性学会研究大会論文集』 9: 462.
- 森本祥一, 2024, 「経営学教育におけるアクティブラーニングの実践報告」『専修経営学論集』 117: 27-50.